# 被爆二世

## その語られなかった日々と明日

深川宗俊 監修
広島記者団被爆二世刊行委員会 編

# 被爆二世

## その語られなかった日々と明日

深川宗俊 監修

広島記者団被爆二世刊行委員会 編

## ▼著者紹介▲

**深川宗俊**（ふかがわ・むねとし）

大正一〇年広島県に生まれる。歌人。昭和二〇年八月六日三菱重工広島機械製作所で被爆。同年一〇月広島で戦後初の職場短歌サークルを結成。二四年一〇月峠三吉らの「われらの詩」創刊に参加。二五年増岡敏和、峠らと反戦詩歌人集団を結成、朝鮮戦争下の抵抗文学運動として全国の反戦詩運動の口火を切る。「反戦詩歌集」「抵抗」などを出す。現在、広島県原水協常任理事、広島平和教育研究所理事、胎内被爆者・被爆二世問題対策会会長、日本民主主義文学同盟幹事、日本歌人クラブ会員、日本ジャーナリスト会議会員。著書＝歌集「群列」詩歌集「広島」記録文学「一九五〇年八月六日」ほか。

**杉原芳夫**（すぎはら・よしお）

大正一〇年愛知県に生まれる。昭和二〇年九月岡山医大救援隊の一員として、広島で被爆者の検診、治療および病理解剖に従事。現在、広島大学助教授。専攻、病理学著書＝「放射能」（共著・三一書房）「原水爆被害白書」（共著・日本評論新社）「この世界の片隅で」（共著・岩波書店）ほか。

**被爆二世—その語られなかった日々と明日　定価500円**


昭和四十七年七月十五日

監修　深川宗俊

編集　広島記者団被爆二世刊行委員会

発行者　下平孝吉

東京都千代田区日比谷公園一—三

発行所　株式会社時事通信社

電　東京（五九一）一一一一（大代表）

振替　東京八五〇〇〇

東京都品川区東品川一ノ六ノ一六

印刷所　株式会社太平印刷社



© 1972, JIJI PRESS　（落丁・乱丁はおとりかえいたします）



0036————3199

# 序

今中次麿
広島平和教育研究所長
広島大学・九州大学各名誉教授

原爆当時わたくしは東京に住んでいて、実兄夫婦が広島で被爆し、翌年夫婦とも死亡した。兄夫婦には唯一人の実弟として、わたくしが相続者に決められていたので、わたくしども夫婦は被爆こそしなかったが、後仕末で大変苦労した。兄の住宅は爆心地の南二キロ余であったから、壊滅したけれども、火災を

免れた。その再建に、当時の経済事情もあって、約五、六年かかった。あれから二十七年後の今日、その被爆家屋にわたしが住んでいるわけである。すでに太平洋戦争が熾烈を極めていた昭和十七年には平和を祈りつつ長女が他界し、二十年の東京空襲では妻と娘が新宿駅で焼夷弾に包囲され、九死に一生を得たこともあった。原爆の経験は再び繰返えされてはならないし、戦争そのものも絶対的にこれを避けなければならないと思う。

とはいえ、誰の心にもあるこの願望が、現実になることは、決して人々の心の問題だけで達成されることではない。戦争をますます苛烈なものとする国家の久しい歴史的過程のなかでの政治の様相と、それは決して無関係なのではない。国家が各時代時代に、その社会体制に応じて示してきた戦争形態の特異性を、われわれは注意深く観察してみることが必要である。そうすれば、現代の戦争もまた、現代の社会体制を反映して、その存在性を示していることがわかる。その社会体制のなかにひそむ戦争の根源にメスを加えることなしに、戦争のこの惨情は改善されない。ひいては戦争を絶滅することも不可能である。



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

ただし広島には、平和問題の前に被災者の問題がある。しかしがんらい現代社会体制の基盤をなしている政策の無計画性は、ほとんど被災者問題の解決能力をもたない。現代社会が計画政策を熱望しているにもかかわらず、現代政策は計画をもち得ない本質をもっている。そこに現在の問題がある。ジャーナリズムが現代国家を福祉国家だという。現政府は福祉政策の充実を主張しているが、そういう政策を実現する本質をもっていないのが、現代国家である。そこからエコノミック・アニマルが生まれるのである。日本ばかりがエコノミック・アニマルなのではない。米国にそれを日本に向かって主張する資格が、どこにあるだろうか。日本が柳条溝を爆破し、満洲傀儡政権を作り、朝鮮北部のゲリラを掃蕩するために全村を焼き払ってしまった事実は、そのまま、否、はるかにエスカレートした内容で、現在ベトナムで再現されている。

平和を追求し、昭和二十年の広島の原爆を問題にする人々が、現在もっとも為さねばならないことは、その総力をどこへ統一するかということである。そのためには当然、政治が必要であるが、その政治的総力の結集を妨げているも

のが、党派的分裂であること、その党派的分裂が、最も必要な根本問題の忘失から生じていることを、反省しなければならないことであろう。端的にいえば原水爆禁止運動の分裂であり、それはイデオロギーの誤りから生じてきていることを反省することであると思う。

このたび広島の記者諸君の手で「被爆二世」が上梓される運びとなり、過般設立された平和教育研究所の所長の任をけがしているわたくしに、序文を求められた。編集にかかわっていないわたくし故、直接本書の内容に添うものにはなりえていないと思うが、同じく平和の志に生きる若い皆さんの良心と努力の結晶に対して、いささか感懐を記して、責に答えるしだいである。

昭和四十七年六月十七日

# 「被爆二世」目　次

序……今中次麿　i

I　あすにむかって――被爆二世とその周辺……三

この子らのあすに何があるか／ひき継がれる〝核の爪跡〟

1　〝帰らぬ鶴〟を越えて〈瀬戸真美さんの場合〉……六

被爆二世であることの自覚／四つのときからの会員／玄海灘を越えて／多くの人に知ってもらいたい／真美さんの夢

2　歩みはじめた二十歳（はたち）〈川口裕子さんの場合〉……一六

私は平凡な女の子／主体的な歩み／活動家一年生／若ものたちとともに／大地に種をまく勇気を

3　看護婦をえらんだ姉〈向井秀子さんの場合〉……二七

陸上競技の選手／お母さんの被爆／弟の発病／弟の死／看護婦の道をえら

んで

4 十三日目の二次被爆が……　〈栗栖みどりさんの場合〉……三七

午前六時までもちこたえれば／いっしょに仕事をしたい・遊びたい／あの人に悪いけど、死にたい／原爆投下後十三日目の放射能が……／母の思い

5 もう少し遅く生まれていれば〈山下恵子さんの場合〉……四五

クラスの中心人物／たった一つの弱音／壁と壁を破るもの

6 母親の心の軌跡〈名越史樹君と操さんの場合〉……五三

原爆の生き証人／ランドセルも背負えないで／フミキ、シッカリ、カンドケ／『ぼく生きたかった』の出版／マスコミにとりあげられる苦痛／ベトナムの子らと

7 四十五万円の希望〈沖縄の被爆者〉……六七

復帰にともなう生活危機／米軍を恐れながら／絶望を深める検診／沖縄の被爆二世／この距離をどう埋めるか

II 原水禁運動と被爆二世……七七

1 黙殺しつづけた行政……七九

『ヒロシマの証言』の所信／行政姿勢の反映？

2 「守る会」生まれる……八五
守る会の目的と方針／被爆者差別は核武装への奉仕／日本中の子どもの問題／目的は一致しながら／『広島はたたかう』
3 被爆二世の健康調査……九七
五人に一人が異常あり／救援に役立つ調査を
4 一貫する行政の姿勢……一〇三
広島県・市へ申し入れ／調査に踏みきらぬ行政当局／母の怒り、市民の怒り／守る会から対策会へ
5 母親たち……一一〇
山下会の歩み／被爆二世と結婚／屈折した経験／手記づくり運動／ヒロシマの母とベトナムの母
6 要求で起ち上がった労働者……一一二
国労被爆協の取組／全電通の調査活動／被爆教師の会／新しい共同の動き
III 医学と被爆者……一一三
1 原爆と医学……杉原芳夫　一一三
医学の根底—政治／障害の隠蔽—ABCC／原爆症とは何か—科学的認識

論／胎内被爆—非人道的調査／遺伝的障害—突然変異／被爆二世—白血病／差別の根源—核戦争政策

2 核戦略体制下のＡＢＣＣ……一五三

二十五年ぶり来広の真意は／原爆投下直後の救護体制／日本側救護を禁圧したプレス・コード／調査研究資料を押収したアメリカ調査団／日本科学者の努力とそれへの圧迫／ＡＢＣＣの調査活動／被害者より加害者がはばをきかす／ＡＢＣＣの真の目的／核戦争対策／ＡＢＣＣは米政府機関／米本国へ送られた被爆者の臓器／アメリカの防衛と安全のための「契約」／無条件完全返還を

3 ＡＢＣＣに癒着する広大原医研……一七二

三つの研究機関／遺体についての協定／ＡＢＣＣへの死亡連絡／原医研のなりたち／原爆医学標本センター／原医研と被爆二世／ＡＢＣＣとの関係／被爆者の背番号／下請け機関であることをやめよ

IV 国、地方自治体と被爆二世

1 〝特別援護はしない〟——厚生省……一八五

「学術の進歩に合わせて考慮する」／その行政上の矛盾／急務にこたえよ……一八七



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

2　〝医科学的証明がない〟――広島県・市……一九三
被爆地の自治体でありながら…／県も市と同歩調／後退する陳情書
3　先進的にとりくむ京都府など……一九九
京都の被爆者／被爆二世対策の実施／北海道でも／川崎市でも
4　長崎にて〈ルポルタージュ〉……深川宗俊　二〇六
被爆二世の死／国への要望／対策にのりだした長崎市／ある被爆活動家の意見／沈黙は差別を助長する／長崎「青年と被爆二世の会」の発足／鎮魂のうたとして／〝死を待つ行政〟をのりこえて
V　朝鮮人被爆者・被爆二世……二二九
1　差別の中を生きぬく……二三一
朴竜時さん一家の場合―一家の苦難／差別にくじけずに　金秀鉉さん一家の場合―生きかえってからの苦しみ／被爆者の子どもの人生／骨身にしみる憤り／快活な二世たち
2　二十七年間の空白……二三一
差別と貧困への告発／広島の朝鮮人被爆者／はかどらぬ朝鮮人被爆者の救援／北朝鮮の被爆者たち／日本の責任

むすびにかえて……二四一
◇資料と年表……二四五
資料……二四七
◇広島市における病理学的調査研究計画の要約とその実施に関する協定
◇「胎内被爆者・被爆二世を守る会」結成趣意書◇胎内被爆者に対する完全終身補償並に被爆二世に対する医療援護措置に関する請願書◇日本原水爆被害者団体協議会結成大会宣言◇被爆二世健康調査一覧表◇原爆に関する意識調査 (1)三次市塩町中学校の調査 (2)広島県教職員組合の調査 (3)広島県高等学校教職員組合被爆教師の会の調査
被爆二世関係年表……二六六
あとがき……二七五

# I あすにむかって

## ―被爆二世とその周辺

## この子らのあすに何があるか

まえの日までぐずついていた広島の空は、からりと晴れあがり、五月晴れの空に泳ぐ鯉のぼりが、〝子どもたちの前途〟を祝福していた。

広島市の海の玄関・宇品港にほど近い県立病院では、この日も、新しい生命が力強い産声をあげ、一足早く生を受けた幼い先輩たちの仲間入りをした。

新生児室の前は、はじめて父親になった人、初孫を得た祖父母、小さい鯉のぼりを手に弟や妹を歓迎するいたずらっ子のお兄ちゃん……ガラス越しの対面には、安堵と喜びが満ちていた。なかには、指の一本一本をもどかしそうに確認し〝余分な不安〟だったことをかみしめている姿もあった。それは原爆が〝ヒロシマ〟に残した悲しい習性であり、呪わしい遺産でもあった。

被爆二十七年、被爆者が老齢化してゆく現在、被爆二世の誕生は、いまや被爆三世に移りつつある。しかし、被爆者手帳を持たない被爆二世を確かめる手だてはない。かつては、被爆者と非被爆者の確認が常識だった広島の医師たちは、出産という大事を前に精神的に不安定な母親に〝被爆者の子どもかどうか〟を確認することは、もはや人道上の問題だとして放棄している。空洞はあまりにも大きくなって医師の手には負えない。

〝被爆二世〟といわれる子どもたちのほとんどは、そうでない子どもたちとかわらない明るさと健康をもっている。

が、しかし、本年（昭和四十七年）四月十七日、広島市内の被爆二世の女子高校生が死亡した。原爆症

の代名詞になっている白血病だった。昭和三十五年八月、当時十三歳（二十一年十月生まれ）だった少年が、白血病のため短い生命の灯を消されて以来、広島市とその周辺だけで、白血病のため命を奪われた被爆二世は、わかっているだけで、十二人に達した。

広島市を見下ろす比治山の上にあるＡＢＣＣ（原爆傷害調査委員会）は、被爆者と被爆二世に、特別な状態は認められないと強調してきた。しかし、こうした中で、ＡＢＣＣ開設当時（二十二年）軍医として来広、臨時所長を勤め、最初に〝被爆者における遺伝の問題〟にとり組んだＪ・Ｖ・ニール博士（米・ミシガン大・人類遺伝学教室教授）が、再びやって来る。まだ、青い目のアメリカ人に接することの少なかったヒロシマの子どもたちから、〝拒否すれば軍法会議だ〟と強引に採血をして非難をあびた代表者でもある。「被爆二世とそうでないものに有意の差はない」としたのも彼だった。その彼が、いま、再度、調査に挑もうとするのはなぜだろう。

「被爆者が、その子孫にいだいておられる不安を軽減するうえで、一助になるよう願ってやまない」（『ＡＢＣＣニュースレター』）と、彼は遺伝的影響について否定的立場をにおわせながら、しかもなお〝ヒロシマ〟の若い生命の血液を求めている。新しい〝研究〟のために……。

「被爆二世が遺伝的に悪影響を受けているのではないか」――被爆者や被爆二世の間に、こんな疑問や不安が強いことは否定できない。

このため、一部被爆者団体を中心に、「本人または保護者が希望する場合、二世にも被爆者手帳を



试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com